

会館芸術 第Ⅰ期・戦前篇 全11巻

【監修】長木誠司／ヘルマン・ゴチェフスキ／前島志保 【編集・解説】朝日会館・会館芸術研究会
協力：朝日新聞厚生文化事業団 朝日新聞社

●揃定価：本体198,000円＋税 ISBN978-4-8433-5088-1 C3370 B5判／上製／クロス装／カバー

第一回配本・全5巻 2016年9月刊行予定

全5巻揃定価：本体90,000円＋税 ISBN978-4-8433-5089-8 C3370

- | | | | |
|------------------------|----------|----------------|-----------------------|
| ●第1巻●1931年（昭和6年） | 解説：前島志保 | 定価：本体18,000円＋税 | ISBN978-4-8433-5091-1 |
| ●第2巻●1932年（昭和7年） | 解説：茂木謙之介 | 定価：本体18,000円＋税 | ISBN978-4-8433-5092-8 |
| ●第3巻●1933年（昭和8年） | 解説：白井史人 | 定価：本体18,000円＋税 | ISBN978-4-8433-5093-5 |
| ●第4巻●1934年（昭和9年）1月～6月 | 解説：高山花子 | 定価：本体18,000円＋税 | ISBN978-4-8433-5094-2 |
| ●第5巻●1934年（昭和9年）7月～12月 | 解説：高山花子 | 定価：本体18,000円＋税 | ISBN978-4-8433-5095-9 |

第二回配本・全6巻 2017年2月刊行予定

全6巻揃定価：本体108,000円＋税 ISBN978-4-8433-5090-4 C3370

- | | | | |
|--------------------------|----------|----------------|-----------------------|
| ●第6巻●1935年（昭和10年）1月～6月 | 解説：白井史人 | 定価：本体18,000円＋税 | ISBN978-4-8433-5096-6 |
| ●第7巻●1935年（昭和10年）7月～12月 | 解説：李賢峻 | 定価：本体18,000円＋税 | ISBN978-4-8433-5097-3 |
| ●第8巻●1936年（昭和11年）1月～6月 | 解説：白井史人 | 定価：本体18,000円＋税 | ISBN978-4-8433-5098-0 |
| ●第9巻●1936年（昭和11年）7月～12月 | 解説：李賢峻 | 定価：本体18,000円＋税 | ISBN978-4-8433-5099-7 |
| ●第10巻●1937年（昭和12年）1月～6月 | 解説：佐々木悠介 | 定価：本体18,000円＋税 | ISBN978-4-8433-5100-0 |
| ●第11巻●1937年（昭和12年）7月～12月 | 解説：佐々木悠介 | 定価：本体18,000円＋税 | ISBN978-4-8433-5101-7 |

映画公社
旧蔵

戦時統制下映画資料集

【監修】東京国立近代美術館フィルムセンター 全34巻
終戦時の混乱を免れた第一級資料群!! ●揃定価：本体845,000円＋税

コレクション・モダン都市文化

【監修】和田博文 全100巻●定価：本体1,800,000円＋税
都市文化の魅力を満載した、モダニズム研究のための基本文献集。

キネマ週報

全24巻＋別巻1／補遺篇 全3巻

【著】東京国立近代美術館フィルムセンター 日本映画の興隆期をつぶさに記録。戦前メディア研究に必須。●揃定価：本体630,000円＋税

近代日本芸能年表

【著】倉田喜弘／林淑姫 全2巻●揃定価：本体36,000円＋税
ペリー来航よりマッカーサー離日までの極詳細な日本総合芸能年表。

新聞における美術批評の変遷

【著】竹田道太郎【解説】山盛英司 ●定価：本体15,000円＋税
朝日新聞に掲載された、昭和前期までの美術記事を丹念に調査追跡。

美術批評家著作選集

【監修】五十殿利治 刊行中・既刊19巻●揃定価：本体387,000円＋税
近代日本の美術界に深い影響を与えた多彩な言説を批評家別に集成。

ゆまに書房

〒101-0047
東京都千代田区内神田2-7-6
TEL.03(5296)0491
FAX.03(5296)0493
http://www.yumani.co.jp/
e-mail eigyou@yumani.co.jp

●特にオススメしたい方
近代美術史、モダニズム、映画、芸能、メディア史、文学、
日本近代史の研究者・研究所、大学図書館など。

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491／Fax.03(5296)0493 年 月 日

ご注文書

会館芸術 第Ⅰ期 戦前篇・全11巻
・☐ 第1回・全5巻 ・☐ 第2回・全6巻 セット

お名前

ご住所

TEL ()

取扱店

※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。

16.09/01.7000.RS

會館藝術

第Ⅰ期・戦前篇
全11巻

◆監修◆長木誠司 *CHOKI Seiji*
東京大学大学院総合文化研究科 教授

ヘルマン・ゴチェフスキ *Hermann GOTTSCHEWSKI*
東京大学大学院総合文化研究科 教授

前島志保 *MAESHIMA Shiho*
東京大学大学院総合文化研究科 准教授

◆編集・解説◆朝日会館・会館芸術研究会

◆協力◆朝日新聞厚生文化事業団 朝日新聞社

◆解説執筆◆（50音順）

李賢峻
小樽商科大学言語センター准教授

佐々木悠介
東京大学非常勤講師

白井史人
早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点研究助手

高山花子
東京大学大学院総合文化研究科博士課程

前島志保
東京大学大学院総合文化研究科博士課程

茂木謙之介
東京大学大学院総合文化研究科博士課程

術藝館會

號ウトイ・オチミ ※ テンモ・ルダ・イテト

5月号

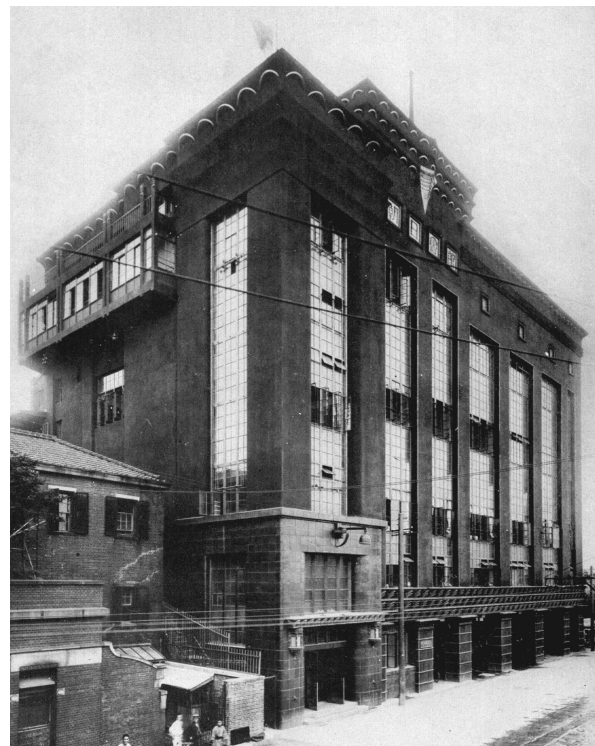
刊 創

館會日朝

ゆまに書房

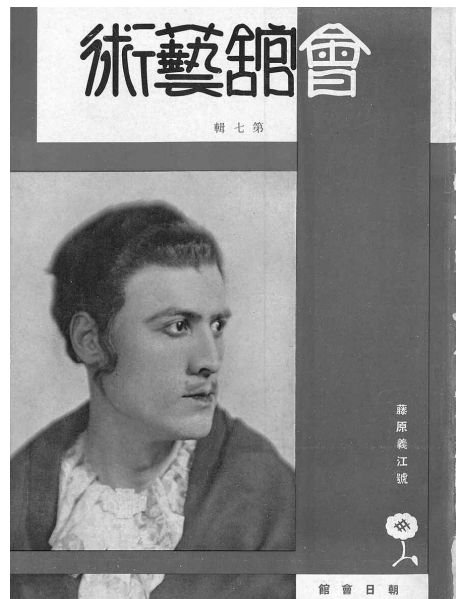
戦前期、関西モダニズム運動を牽引し、中心的役割を果たした総合文化雑誌

監修のことば



朝日会館 (出典・株式会社竹中工務店『建築写真帖』昭和二年再版)

評論記事から、短編・長編小説、国内外の著名人の随想・インタビュー、各国の文化事情の紹介までを盛り込んだ総合文化雑誌に発展した。その後様々に名前や規模を変えつつも1953年（昭和28年）までの長期にわたって発行され、一時期は全国展開も計画されていた『会館芸術』は、同時代の「阪神間モダニズム」とも相通じており、東京一極集中ではない近代日本の文化活動の在り方を示す好例と言える。全集未収録の著名人の作品・評論も多数掲載している本誌は、戦前から戦後にかけての様々な分野の展開に関する貴重な資料でもある。



長木誠司

東京大学大学院総合文化研究科 教授

ヘルマン・ゴチェフスキ

東京大学大学院総合文化研究科 教授

前島志保

東京大学大学院総合文化研究科 准教授

大阪朝日会館（以下「会館」）は1926年（大正15年）10月から1962年（昭和37年）10月まで大阪・中之島に存在し、「大阪の文化の中心」「文化の殿堂」と称されていた総合文化施設である。会館は母体の新聞社とは一定の距離を保ちながら、独自の公演、上演、展覧会、講演会など多彩な活動を展開し、関西の近代文化史において重要な役割を果たした。

ここから1931年（昭和6年）に創刊された雑誌が、『会館芸術』（～1953年〈昭和28年〉／全222冊 朝日新聞社会事業団）である。同誌は会館の機関誌として出発したものの、創刊後数年で、音楽、舞踊、演劇、映画、美術、写真の解説・

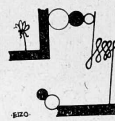
本文

約77%に縮小

こゝで一吋過去をふりかへて見る。僕等がはじめて世界的の名を冠して現れたミツシャ・エルマンのグアイオリンに、驚喜の眼をみはつたのは、確か大正七年だつた記憶する。次いでハイフエツを聴き、ゲンバリストを聴き、クライスラーを聴くに及んで、エルマンの持つ藝術が、たゞ不思議な技巧の魔術に止つて、内面的表現の深いものではないものであることを漸くに感じて、しかし當時の感激と驚喜ののであつた。エルマンはシミロワイツチを、ヒアスト

藝術の國際交戦都としての大阪を、そしてその第一ステーションとしての朝日會館を考へて見る。東京と大阪、これは世界の藝術交通路の二大中継驛である。世界の西より東より、日本に集る藝術人の多くは、必ずこゝにその携へ來つた藝術上の情狀と履歴書を提示して、資格を審査され、しかる後始めて日本における公演の舞臺、そのはじめての呼びかけを待ち得る第一の場所として、わが朝日會館は今日までかなり重大な役割と寄與を持ち得て來た。

— (10) —



藝術の國際ステーション

小倉 敬二

口を、やはり感激に爪立ちつゝ、聴いたことを覚えてある。

今思ふと、彼等は世界的どころか、二流、三流の、或はそれ以下の旅藝人だつたかも知れない。しかもそれなりの、僕等は限り知れぬ感激によるこづねをもつて聴いたのである。それは強ち僕等ばかりぢやなかつたらう。何しろ、大阪に洋楽團體といへば羽衣管絃團一つしかなかつた時代なのだから――

◇

それから、間もなくゲンバリストが來る。ハイフエツが來る。クライスラーが來る。ゴドウスキーが來る。シュエーマン・ハインクが來る。アルテスメスガ來る。ホルマンが來る。名巨星次々に來朝して、大阪の樂壇はそれこそ百花一時に亂れ咲くの壯觀を呈した。世は春、成金勃興の時代である。金にまかせているんな計畫が立てられ、いろんな音楽團體が生れた。社交婦人好愛の一群の有閑ダムが、「藝術の殿堂」の假装の下に、孔雀のやうな眩耀をもつて社交界に乗り出して來たのよりよき夫たちは、天晴れ音楽家のパトロナたることを標榜して、世界的樂人の招聘に札ビラを切つた。音楽は

この人たちにこつては一つの見榮であり、社交上の儀禮であり、あそびのための道具であつたかも知れない。

◇

が、間もなく幾ひ來つた經濟恐慌、それと共に音楽の世界も一時に寂びれて、目ざましい音楽會も、従つて名ある世界的名手の招聘も自然中止の形になつた。有閑夫人たちは音楽の催しから退却し、音楽團體も内部的清算を餘儀なくされて、或は潰れ、或は有名無實の存在に没落した。けれど、過去何年かの間にはゆる樂壇華やかになりしころに養はれた市民の音楽熱は、さうした一群の有閑夫人や音楽團體の没落消長如何に拘らず、極めて根強いものであつた。ほんさうに選つた心で、それら世界的巨匠の藝術を蔑視し、理解しその趣味に徹しやうとしたのは、さうしたきびやかな一群にあらずして、眞に手に汗を流く中産インテリ市民層だつたのである。彼等こそほんさうに新しい音楽を實生活の貴重な養ひ分として養ひ取らうとしたのである。かくて數年、朝日會館が生れ、朝日社會事業團が大阪朝日新聞社の社會文化運動の一翼として、劇に、音楽に、舞踊に、あらゆる藝術部門への活動を再び目ざして、われら大阪市民は、こゝに再び目ざましい催しを持ち得るやうになつたのである。再遊のゲンバリスト、デニ・シヨカン舞踊團、ルース・ペーザ、シュミツ、ハンセン、ゴチセ、モイセウツチ、アルハンチーナ、セゴヴィア、イングリツシュ・シンガース、カリ・クリチ、ケベリツク、サカロフ等々、そして近くまた世界一の輝

けるカペラシンガア、トチ・ダルモンテ夫人や我國唯一の世界的舞踊家伊藤道郎氏を迎へやうとしてある。一方日本内地の團體としては土方氏の新樂地劇團、近衛氏の新交響樂團、山田耕作氏の日本樂劇協會、石井遼舞踊團、藤原義江、關屋敏子、各流の能樂など、度々公演されて、會館に確乎たる地盤と大衆の支持を固めつゝある。これらの催しが、大阪の、關西の、日本の文化に如何なる寄與をもつか、その文化運動の紹介の使徒たる朝日會館が文化運動の一翼として、如何なる役割にあるかを、どうか冷靜に批判して頂きたい。

◇

朝日會館は藝術の忠實なる一紹介機關であり、中継驛である。その手は世界にのびる手であり、内にそだつものなをばぐみ愛撫する手である。よりよきものをよりよく、よりびるゝ紹介したい――會館の意企の大きな部分がそこにあるのである。

◇

●1931年5月号(創刊号)より

本書の特色

- 内容は、美術、映画、写真、演劇、舞踊、音楽、文学、評論、国内外の著名人の随想、落語、各国の文化事情の紹介等々、様々な分野にわたる資料の宝庫。
- 全集未収録の作品や評論も多数収録する極めて貴重な資料群である。
- 音楽：藤原義江、朝比奈隆、山田耕柞／演劇：千田是也／映画：淀川長治／文学：井伏鱒二、与謝野晶子／美術：藤田嗣治／舞踊：伊藤道郎等々、錚々たる執筆陣による第一級資料。
- 現存するものが極めて少なく、なかなか見ることのできない極めて稀少な雑誌である。
- 各巻巻末に「朝日会館・会館芸術研究会」による詳細な解説を付す。
- 続編として戦前篇刊行後、「第Ⅱ期・戦中篇」刊行予定。(刊行日未定)

◆特輯タイトル抜粋◆

〈〉は収録巻数 原誌表記通り

●トティ・ダル・モンテ／ミチオ・イトウ号〈1〉

●宝塚少女歌劇／ヨセフ・シゲティ号〈1〉

●花柳寿美舞路号〈2〉

●藤原義江号〈2〉

●新春映画号〈3〉

●特輯 新交響樂團〈4〉

●特輯 江口隆哉・宮操子群舞公演／新樂地劇団「櫻の園」〈10〉

●特輯 國際映画〈10〉

●特輯 朝日会館能〈10〉

.....

朝日会館五ヶ年間各種催物一覧表(第4輯付録) 内容項目(収録期間：1926年10月～1931年11月)

●演劇上演目録

●能楽上演目録

●洋楽上演目録

●邦楽上演目録

●舞路上演目録

●講演会開催目録

●映画公開目録

●コドモの会開催目録

●展覧会開催目録